昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和二十八年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一七三号）

慈光

第十五巻　第九号

目次

「教行信証」信楽釈（五）……近角常観…（1）
近角常音先生お法語謹録……吉田延世…（8）
死と対決出来るか……柳瀬留治…（12）
末灯鈔第六通……花田正夫…（17）
念仏の妙用……長岡高人…（24）

「教行信証」信楽釈（五）

第八席（一）

近角常観

只今は、朝夕信仰談とは申しながら、大声を発し、まことに慚愧に堪えぬのであります。（コノ前ニ信仰ノコトニツキ厳シク人ヲ誡ムルコトアリ）つきては之を御縁に、今の処を是非皆様にも充分聞いて頂きたいと思うことであります。既に前々々席に於いて済ませし処であり、申さぬ積りで居つたのでありますけれども、今のお話があつたから、之を機会にお話するのでありますが、第五席に於いて申した「至心釈」の処の光明寺和尚の御言葉の中に

『又真実に二種あり、一には自利真実、二には利他真実なり。』

ここを五席では、極くざつと申したのであります。而してこの中、自利真実に就いては、この三信釈では略されてあるのでありますけれども、今席にこの味いにつきお話したいと思うのであります。

既に申せし如く、親鸞聖人は、利他真実は仏が我々不真実の者を、飽くまでお見捨て無き真実が利他真実である。又自利真実は自力の真実であると、おとりなされたのであります。而してその自力の真実とは如何となりて、聖人は『愚禿鈔』の中に、これを二つに分け、自利真実に二種あるとて、次の如くお示しなされてあるのであります。

自利真実に就いて復二種あり

一には、厭離真実。

二には、欣求真実。

厭離真実とは、此の世は当てにならぬ、苦の世界であると、この世を厭い捨つるのが厭離真実である。又欣求真実は浄土を欣求して、浄土に往生したいと願い求むるのであります。

で斯く自利真実という中に、厭離穢土、欣求浄土の二種ありて、うち、この世を厭離することを先として仏道を求むる厭離真実は、聖道門の自力である。又浄土は楽しき処

と聞きて浄土を欣求する念を先として、仏道を求むる欣求真実は、浄土門の自力である。二者共に、此の世を厭離する、若しくは浄土を欣求する念を先として仏道を求むるのであれば、共に自力であるとの仰せなのであります。

○

其処で只今のお話に引き続き、信仰上の話故、遠慮無く申します。全体今日信仰を求めらるる新らしき青年諸君は青年諸君、又従来よりの御同行は御同行で、その求めるのがどうなつて居るかと言いますに、皆求めるということが先になつて居るのである。而してその求めるがどうなつて居るかと言うに、普通御同行達の求めらるる順序は幼時より説教に於いて、この人生は無常の処であると聴かされ、この苦の世の厭うべきを聞き知り、死ぬると地獄に堕つべき浅間しき身の上なることを知らされ、この苦の世に早く安心して、未来極楽往生出来るようにと、強ち説く方でこの順序で説くでは無けれども、自然そういう風になり、従つて、御同行の方に於いても「この婆婆はあてにならぬ」と思い込み、「それだから早く信仰を得なければならぬ、聴聞しなければならぬ」と求める、という風になつて居るのである。これが普通御同行方の求めらるる道行となつて居るのであります。これは今も言う如く、説く方で必ずしも然う説くのでは無けれども聞く方で自然に然うなつて来るのである。

それはなる筈である。何故なれば他力が真に頂けるまでは何人も皆無力故、自力の心で聞くから、聞く者の方でそうなつて来るのである。

又青年諸君が道を求めらるゝ順序にすれば、それ〴〵あることとなれども、この学舎に来て下さる多くの方は、理想的なる、信仰だとか、正義だとかいうようのことを好まれる方にて、つまり理想的に信仰を求めようとして居らるるのである。

でその目的は「信仰が無くては人格の中心が立たぬ。信仰がなければ社会に在りて活動が出来ぬ。故に信仰を得てこれらの事の実行が出来るようにならなければならぬ」。又「道徳の実行問題にしても、信仰が無ければ、真に真面目に道徳を実行することが出来ぬ」と、先ず高い処に自分の理想を置いて、その理想の下に信仰を求めようとして居らるるのである。これが一般青年諸君の求道の道行であります。

処で、これでは両方とも未だ真実の人生問題とはなつて居らぬのである。言わば畳の上の水練に過ぎないのであります。これでは何時までやりても、夜の明けることはないのであります。

成る程、御同行の方にすれば、此の世は何時死ぬかもし

れぬ、死ぬと思うと未来が恐ろしいというのも、それは死ぬ時のことを考えて、自分の頭でそう問題をこしらえ、そう思うて苦にして居るというだけの事にて、現在今自分が実際問題に行き詰つて苦しんで居るというのでは無い。

又青年の方にすれば、第一人格を高め、正義を実行するという事を先にして、それで我身は悪しき徒ら者と頭が下る自覚を生ずるという筈が無い。何故なれば頭が下れば人格の養成、正義の実行などいう希望は自分に於いては駄目になつて仕舞うのであるから、これでは真実お慈悲を求めることになつて居らぬのであります。

又同行信者の中には、今日の青年などは煩悶の解決など云うことをいうも、仏のお慈悲は、極楽往生という後生の一大事の問題であるということを言われる。成る程これは私も然う思う。けれども蓮如上人も『御一代聞書』の中に

『極楽はたのしむと聞いて、参らんと願いのぞむ人は、仏にならず。弥陀たのむ人は仏になると仰せられ候』

とあつて「極楽はたのしい処である、地獄おそろしい処である」と考えて、それで極楽に参らんならんと願い求むるのでは、真実の信仰は頂けぬのである。併しそれも今死ぬると差し迫つて居るなれば、頂き易いのでありますけれども、これも其時すぐ頂けるならよきも「それだから頂かんならん〳〵」となると、容易に頂かれぬのである。で要するに、厭離穢土とこの世の厭う可きこと先立て、又欣求浄土と、信仰を得て後到れる結果の活動とか、人格とかいうことを先にすると、頂かれぬのである。我々は腹がへつてるから、物が喰べられるのである。然るに腹のふくれることを先に予想してかゝつては、喰べられぬのである。

我々は今遭れる道が無いから助けを求めるのである。然るに助からぬ前から、助かることや、偉くなる事を先にするから、得られぬのである。

殊に私は、自分の方より求めたというよりも、実際問題に突き当り、苦しんで気づかせて貰うた事故、実際に苦しんで居らるる方には、よけ察しが届き易いのであります。

或る予想を先立てて求めて居らるる人でも、それで信仰が得られぬから、得られぬという処が苦しみになつてある。未来が恐ろしいと言わるる人でも、未来が恐ろしいよりも、それだから信心を得にやならぬ、がその信心が得られぬ〳〵という苦しみが確かに実際問題となつてあるのである。

○

そこで少しく前に戻つて申しますに、親鸞聖人が、斯く厭離穢土、欣求浄土を自力と仰せられたは、如何にもひどいようであるけれども、之が実に法然聖人からあるのであります。

即ち当講話開始以来、度々繰り返す、法然聖人が『選択集』に於いて、発菩提心までが自力であるとて、捨てておき仕舞なされたというが之である。度々申す如く、法然聖人、親鸞聖人はこの為に流罪にお遇い下されたのであります。先日もこのことを話したら、或方が初ごとを聞いたとて、非常に喜び礼を述べてお帰り下された。

即ち阿弥陀仏が法蔵比丘の昔、衆生往生の行をお選び下された時、あらゆる行を皆選び捨て、最後に発菩提心までが、これがあつては衆生が助からぬとて、これまで選び捨てて、唯南無阿弥陀仏の一行を摂取して下されたという事である。

これが何か、我々の方より往生したい、信心頂きたいと称うる南無阿弥陀仏ならば、これ菩提心のついてある南無阿弥陀仏である。これでは我々助かることが無いのであります。

処が今、阿弥陀仏の選択本願の南無阿弥陀仏は、ここが今言う如く、純粋の南無阿弥陀仏である。初めより発菩提心の準備のついて居ぬ南無阿弥陀仏である。此方より信仰を得たい、浄土に生れたいなどいう思いの取り除かれたる一向専修の念仏である。親鸞聖人が厭離穢土、欣求浄土は自力であると言われたは、これをお知らせ下されたのであります。

○

そこで人生問題の上より申しますに、第三席に於いて申した如く、私が苦しみてして見よう無かつた時に、

「誰かこの自分の浅間しき、して見よう無き心中を知り抜いて、これが哀れであると真に同情して呉れる友人は無きか」

と半年ばかり苦しんで求めた。今信仰問題で信仰が欲しい〳〵の苦しみがこれなのであります。

処が欲しい〳〵と求めることでは決して与えられぬ。私が自分の心を知つてくれる同情者を欲しい〳〵と思うてる中は、苦しむばかりで、決して得られなかつた。此方より求める事では、遂に最後まで、開けなかつたのであります。

それ故、親鸞聖人は、今至誠心をお示し下さるに、斯く此方より、発菩提心を起し、此方より厭離穢土、欣求浄土を先立てる自利真実では駄目であるとお知らせ下されたのである。

処が今他力の利他真実とは何うかと云うに、此方は不実ばかりの奴なのである。この一点まこと無き不真実の奴が哀れであると、仏の方より哀れんで下さるが、仏の利他真実である。

故にこれには一点こちらからという事は無い。此方は唯

向うからの広大なる御親切をうけるばかしなのであります。こちらは信心を得たいの、極楽に参りたいのという殊勝な思いがあると思うて居るのであるけれども、実はそう思うて居るのが間違いにて、そんな心は微塵も無く、飽くまで不清浄不真実ばかり、助かる道とて一筋もあいて居ない我々なのである。仏の方より助けて下さる手懸りすらも、この我々の心の上には一点あいて居ぬ。何処までも虚仮不実だらけの此方である。

安心を求める、信仰を求めるというのも、社会にありて活動をなし、自分が立派にやりたいために求めるなれば、是れ仏を自分の便利に利用せんとして居るのである。

又未来自己の安楽を求め、極楽に生れたいため信心を頂きたいというは、是れ自分の利欲安楽の道具に仏のお慈悲を用いようというのである。畢竟親が自分のために苦心して遺して置いて下された財産を、これがあるからみんな出して自分の放蕩の資に使つて仕舞えと言うのであります。されば斯くの如き心を本として、我々が信心を頂こう、お慈悲を得ようと言つて居るのは、畢竟これ、この浅間しき根性を押し進めて、もつとうまい事になり度いというのである。これでは決して得られることは無いのであります。

さて斯くの如く浅間しき心の自分にて、三界に誰一人振り反つて見て呉れる者もない身の上とすれば、最早実際自分はこの世の間に身の置き所も無い。死してこの苦しさがやむものならば、死んでも仕舞おうが、死んだとてこの根性は善くならぬ。すればどうにも斯うにも進退行き詰つて、何処に身の置き所も無いというのが、私共今日、生死流転の有様である。而してここの処へ向うからの遣る瀬なき大悲の御呼び声が来て下さるのであります。

即ち善導大師二河白道のお言葉に

『我今回らば亦死せん、住るも亦死せん、去くも亦死せん。一種として死を免れず』

この往くにも帰るにも、進退谷まつて何うにもして見よう無き処に

『西岸上に人有つて喚んで言わく、汝一心正念にして直に来れ。我能く汝を護らん、衆べて水火の難に堕せんことを畏れざれ』

と。向うの方から呼びかけて下さるが利他真実の御呼び声である。ここの処を能く頂かねばならぬのであります。

○

で今申すが如くに、我々には真実の心というものは、卯の毛のさき程も無い。道を求めるというのも、我々の名誉心のくつついた道を求めるのである。人の同情を求めるというも、人の親切を自分の利益に用いようと言うのである。為すこと、思うこと、我々のは一切罪ならざるは無い

のであります。

最後の後世、往生を求めるという事すらが、今言う如く名利の形を変えたに過ぎぬのである。「自分はお慈悲によつて、我身の悪しさを知らせて貰つた」というのまでが、「それだから今後善くして行かねばならぬ」という苦労のついてある間は、矢張り問題は今まで人相手であつたのが、信仰問題に変形したという迄である。

も一つ言えば、人生問題に苦しみて、法を求めらるる皆さんが、自分の心の悪しき事は到底人にも言われぬと言われる。その我が心の悪しさの問題を直に信仰の問題として、信仰によりてそれ程の悪しき心を善くしようと云う処に、腰をかけて居らるるから、動かれなくなつて、道が開けぬのである。これでは矢張り何処までも自分なるものをよい子にして行こうというのであるから、他力の救いが頂かれる筈は無いのであります。斯く此方の心を先にして行く、この方の道では、到底信心は頂かれぬ。

で私は常に申すことでありますが、私が信仰に気づかせて貰つた当座、真実の信仰からでなければ、政治も実業も、何事をするも皆駄目であると、大に主張したことでありますけれども、併しそれでは何うも思うようにみんなの心にとおらぬ。「これはみんなの心に信仰が無いからである。故に信仰が根源である。信仰さえあれば、皆自然に分つて来るのであるから」と、其処で求道学舎と看板を掲げ、皆様に聞きに来て頂くことにしたのでありますが、するとこの求道の文字である。皆さんが文字通り、道を求める、道を求めるとお出で下さる傾きが見えて来たのである。然し今云う如くこちらから、道を求めるのでは決して信仰は頂かれぬ。

で一時はこの求道の文字を改めなければならぬかとさえ考えた程であつた。処がこの求道なる名前をつけた時は、大経の法蔵菩薩の御苦労をお説き下さる処より名前を選んで置きながら、其時は気づかなかつたのでありますけれども、この求道は実に法蔵菩薩の求道であつたのである。

斯く我々の自分の方より、道を求めなければならぬ〳〵と何程もがいても、それでは駄目であるに、斯く法蔵菩薩が、その我々のために、自から道を求めて下されたのであるから、有難いのであります。

なお段々頂かせて貰うて見るに、法然聖人が、発菩提心は駄目であると仰せられたを、親鸞聖人は自力の発菩提心は捨てるが、浄土の大菩提心があるとお示し下されてあるのである。これは何かと云うに、信心が浄土の大菩提心であるからである。

此の浄土の大菩提心は、我々が此方から頂こうと求めて頂くのでは無い。上、菩提を求めるとは、仏が此のして見

よう無き私を哀れんで下さる仏の御心を頂くが、浄土の大菩提心であつたのである。『和讃』の中には

浄土の大菩提心は　願作仏心をすすめしむ
すなわち願作仏心を　度衆生心となづけたり。

という御言葉もあります。で斯く我々が仏の広大なる御心を、有難うと頂く、これが浄土の大菩提心である。斯く我々、信仰前には菩提心も何も無れけども、信仰の上からは、浄土の大菩提心が現われて来るのである。

又厭離穢土、欣求浄土の心も、信仰頂くまでは、我々初めよりあることなけれども、信心頂きた時にはそれが信仰の上より現われて来るとなるのであります。即ち昨日まで自分の一身に思うようにならぬ〳〵と苦しみて居た者が、お慈悲を頂きて「あゝ今迄はつまらぬ心配をして居つた」となる時は、今迄苦にして居た此の世が捨てられ、お慈悲一つが有難いと欣ばせて貰うようになるのである。それ故聖人は、此のたびは『信巻』の初めに於いて

『謹んで往相の廻向を按ずるに、大信心有り、大信心とは則ち是れ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択廻向の直心、（中略）真如一実の信海也。』

と仰せられてあります。即ち厭離穢土、欣求浄土はお慈悲を頂いた上から現われて来る所の味いである。然ろを頂かぬ前から、信心を頂きたいの、極楽に参りたいのというのは、いつの間にか――まことある如く思つて、自力根性に陥入つて居るのであります。

未完

詠草

波岡　茂輝

吾が心いかなれば子に通はざる隔て心の吾があらなくに

よし汝はいかなる罪を重ぬとも親なれば吾が汝をすてめや

○

土深くこもりて眠る虫のごとわがやみこやり冬をひそむも

さみだれの日を日もすがら捨て仔猫家をめぐりて鳴き止まずけり

戸をあくる音すれば仔猫鳴き止みて駈けて来りて縁に上るも

○

貧しさの苦しみ知らぬ人々の道をとくこそおこがましけれ。

友の世にときめくを見てねたましと思ふ心のふと湧きにけり

吾が死なば真実報土に生くという悦びの外何事もなき

「近角常音先生御法話」謹録

吉田延世

即是凡数の摂にあらず

昭和十四年四月二日

長年、信心を獲たい〳〵と聴聞したけれど遂に得られずやけくそになつて、信心をえようがえまいが、どつちが東やら西やらわからぬようになつた。その時

「弟を子供のときから育てて来たが、そのことで何の不足はなけれども、いつまでたつてもあいつの我慢のやまんのが可愛想である」

と、兄貴が愚痴を人にこぼしているということを人伝にきいたのであるが、それが思いがけなく生きた人から言われたのであるが、このことが仏さまの仰せになつて聞えてきたのが問題である。

人間というものは、さか立ちになつても自分の我慢が止むものではない。その我慢のやまぬのが可愛想であるという三十年来の法話である。そのお話が、気がついて見れば我慢がとれなくても心配するなとの血の涙のお説法であつたのである。これが選択本願で仏の御真実であつた。五劫思惟、兆載永劫の御苦労の結果の南無阿弥陀仏である。これが凡夫摂取の南無阿弥陀仏の教である。

しかし、我慢のやまんものを、どこどこまでも砕けてゆく者に対して心配するなという、これは耳があつたら聞える筈である。

ところが、我慢のやまぬのが可愛想であるとの兄貴の声が聞えない。罪の深いことばかりに気が囚われて、くらやみになつてくる者にとつて、それにかかわらず、その暗闇に他より光がさして来たのである。

如来の御恩の高いことを仰がずして、ただよしあしということばかり申しあい、自分のよしあしばかり立てて、何時までも我慢がやまぬ、しかも我慢のやまぬ罪の深いことに気がつかない。自分ではよくやつていると思つて、自負している時に、兄貴が、

「あいつの我慢のやまぬのが困つたものだ、可愛想であ

る……」

と、他からは、あきれられている者をすてないで愚痴をこぼした。

自分がよい気になつていてもどもならんのである。私の話はこれよりほが何もない。何も自分の我慢のやまんのを見てくれとたのまないのに、その有様を見ていて、だまつて居られず、法界より出世せられ、衆生済度と自ら宣布なされしが仏教で、如来廻向の渕源は、この我慢のやまん一点のために、地獄におちて行くのを見るにみかねて出て来られたので、変な先生が出て来たものである。この世の中のどこを探しても、極重悪人を救わずばやまぬと、どこどこまでもすてないという変な先生という者は居ない。

これはこの世にいる筈もなく、誓願不思議の桁のはずれた物好きな先生である。

○

如何なることになろうとで、どこまでもすてないという教は、真宗、親鸞教である。

○

自分の力で、きつとよくして見せるという信念も、子供があえなく死んだ時は、一遍に砕ける。

その砕けてしまつた者に、それは無理ない。悲歎、苦悩している者に対して、それは可愛想なことであると、御理解ある同情大悲の人はこの世ではあるはずのものでない。

○

ちつとでも自分の信心のうまくいくことのみをたのみ、御仏の深い真実をよそにしていたのである。そのものに対して、自分のよいのに自慢するな、砕けるのを気にするな悲しみなげくなとのお慈悲である。

○

山奥に親を捨てに行き、親の枝折りを砕き〳〵して居るのに親は子のために枝折り枝折りしていたのである。

○

仏の御恩をはねのけ〳〵している者である。『歎異鈔』の総結文に聖人の常の仰せを、

「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」

と示されている。これは私のおはこで、この一人が為なりけりの一人が、お慈悲を戴いているのでなく、親の御親切をふみつけ〳〵していたのである。

自分ひとりで、戴いた〳〵と思つていても、日がたつにつれて空になる。駄目になり、もうききたくないと自棄になる。よしあしにあけくれしているものに対して、御見捨てない如来の御真実である。

難度海を度する大船

昭和十五年三月十日

こんなことでは駄目だと思う、日頃の心をひるがえしてこの駄目な者を見すてぬ、その駄目なところを見てやろうという大悲の親心を戴くと、この憂苦無常の世をすごすことが出来る。

○

「さすがよからんもをのこそ」となると、この駄目な者はたすからぬ。その者を救うのだとは信じられなくなる。しかしこの世は背に腹はかえられぬ世であるから、痩せ我慢でも斃れるまでやらねば生きていかれぬ。

○

文常が出征の日、見送りの帰りの汽車中から夜中になつても眠られず、たしかなところをつかもうと思えば思うほど心淋しい限りである。難度海とはこの眼の前の暗黒で、この難度海を渡る大船は、如来の誓願の船である。自分でこの世が見えるならば難度海ではない。このちつともわからぬ世の中を渡る大船である。

○

生きて凱旋するか、戦歿するかわからぬ。それにつけて今生にて救わずんば死後と、どこまでも救い遂げなくてはやまずという弥陀の願心である。私共のおめでたさは、明日をも知れぬこの身を、ただ順境な時はお慈悲と思いあやまる。それでは大逆境の死はどうするか、これが問題である。

○

水火の中にひらける白道について、こんな例がある。

○

ある篤信のクリスチャンの未亡人であるが、自分としては貞女二夫にまみえずとの考えもあつたが、かく思いつつも身寄り一人もない己が身を思えば、たよりないと淋しがつていた。知人某がその様子を見て「自分は妻に死なれ八年間不自由をしている。是非来て世話をして下されよ」と求婚したのである。

その後、その人が病に倒れ、その姉なる人が来て看病にあたつていたが、その未亡人に「この際是非来て世話をして下さい。そうすれば何ほど私も本人も助かることですから」と懇望されたのである。

とうとうその未亡人の心も動き「自分の身をすてて人を助け善をしよう」と決心し、その人に嫁し、何事もなく幸福に暮していたのである。

ところが一年すぎた時、ふとしたことからその人の郷里に病妻と子供もあることがわかり、未亡人は再び孤独の思いとなり、最早、覆水盆に帰らず、かつて再婚の相談をし

た時、「あなたが未亡人をとおしてくれるのであれば、親戚一同で生活の保証はする決心であるが、それかと云つて是非にと引きとめることは出来ぬ」と亡夫の一家の親切な申出をことわつて嫁いだ身が、再び離縁も出来ず、かと云つて、正式に入籍するには、病妻と子供を追い出すことになるので、そこで煩悶して途方に暮れて、求道会館にたずねて来て、道を求め、方法をたずねた。その仲介に入つた友人もまた困りはてて共に訪ねて来た。

そこで「おのれ自身淋しき身をかこち、たよりなさに堪えられず、その心の濁りに気づかずに、善をなさんの人を助けんのと、自分の善と思う心をとつて頑張つたのは、即ち大いなる我執我慢の心である。このように我執我慢のやまぬ者を憐れみ、見すてぬ親心、この仏のお慈悲を信ずることが何より大切である。そこが知れると、その家に止まるもよし、病妻を助けるもよし、またその家を去るもよく、孤独をまもりつつ業報にまかせ、唯仏のおめぐみにすがつて、この世をすごす一白道がある」と信仰談を続けた。

幸に仏の御真実に気づき、早速郷里に行き、病妻の前にありのままを告白し、

「何も知らずに嫁して来ましたが、お病気の奥さんをどんなにかお苦しめしたことか。この上は奥さんの仰言る通りにいたしますから何なりとお心のすみますように仰言つて下さい」

と、大懺悔をすると、

「そうでしたか。それでよくわかりました。実は永年私が病床に居りまして主人の世話も何一つ出来ぬ身でありますので、誰方か世話をして下さるよいお方があつたらと探して居りました。今日お目にかかりお話もききまして、貴方こそ私に代つて主人の世話をして下さるに一番よい方と思いますから、どうかそうして下さい」

と言うことになつて、そこに道がひらけたのである。

◆

思食

たとえは、大海に海亀のような動物がいる。この動物は海の中では卵を産まないで、海岸に上つて来て砂の中に卵を産みつけ、砂をかぶせて再び海の中へ帰つて行く。

そのとき親の海亀が常に卵のことを思つていれば、その思いが卵にとどいて卵は腐らないけれど、もし親の亀が卵のことを忘れると卵は腐つてしまう。これは亀の卵が思食を食べて生きている証拠である。

このように、有情の念力で有情が生かされているとき、この念力を思食という。

「如来浄華の聖衆は、禅三味を食と為す」

死と対決出来るか

柳瀬留治

（昭和三十八年）六月十六日の朝日新聞のPR版を見るともなしに見ていた処、その中に井上靖氏の「父のこと」という一文にあつた。

氏の父上が八十一才で亡くなり、四年になる由です。その文中「父の死に依つて、私は二つのことを教わつた。一つは父が私と死の間に一枚の屏風として立つていたということである。父の生きている時は、私は父でさえまだ生きているのだからといつた気持で……私は自分の死というようなものを考えたことはなかつた。併し父に死なれて見ると、死と自分との間がふいに風通しがよくなり、すつかり見晴しがきいて来る。次は自分だという気持で、遙か前方に死の海面の一部が望まれて来る。これは父に死なれて初めて知つたことである。……父の死に依つて教わつたことがもう一つある。それは父が亡くなると同時に、父は私の心にはいり込んで生き出したということである。……父亡死なれてから私は自分の心にいる父を感じ始めたのであ

る。……」

それを読んで私も少なからず同感を覚えた。私の父が死んで四十幾年になるが父が死に対しての屏風といつた感は幾分はあるが、それよりも敬慕している先生や先輩や親友などの死により、死というものを身近に感じ来るや切です。

又父を初め日頃頼りにし慕つていた人々が亡くなると悲しみ淋しむよりも、非常に身近かになり、呼べば応えて貰える程に近く感じられて、迚も親しく心温まる感が深いのです。

井上氏のいわれる「私の心にはいり」来つたと同じ心持のようです。井上氏も、そした心持ちは恐らく宗教的なムードの醸し来るものだろうと思われるが、私のは特にそうしたもので、その人の存命中よりも更に更にぐんと距離が近くなつて、訪ねることも手紙を出すことも要せず、思う即座に逢われ、言わずして伝わり、うなずき合つて語れる

のです。そして互いに心はぴつたり一枚になり、法悦に似た喜びとなるのです。それは主に信仰上の友の為かも知れません。

○

昨年だつたか私の亡き友の妻君が死にました。胃の癌腫が崩れて数回吐血をし死に瀕し乍ら、どうあつても生きるのだといつたとのことです。誰しも死をさきのものとし、生きている現実を肯定し、恰もそれが、どこまでも続けられる如く思う。それが宗教上立派に安心決定していても、我々の生細胞が生に執しそうさせるもののようです。結核に冒されて死亡した人の肺を解剖しての話がある。本人が既に死したのに白血球が盛んに菌と戦つていたとのこと、生細胞の如何に執拗なものであるかを思わせられることです。

歎異鈔の九章に唯円房の不審に対し、親鸞聖人が仰せられている一節に「いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんと、こころぼそくおぼゆることも、煩悩の所為なり、久遠劫より今まで、流転せる苦悩の旧里はすてがたく、未だ生れざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことによくよく煩悩の興盛にそうろうにこそ……」聖人さえかく申されていることです。

無宗教の人で死後は無に帰するのだと思つている人でも生に執しない人はあるまい。生細胞からして死ぬまいとしているのです。

かの大戦時のこと予科練の若者達、それに士官候補生達の死に切迫し、死の決心が出来ず悩んでいる話を聞いたこともあることです。当時、国のため天皇のためという美名を以て煽り、血を沸かせ、酔わせて決心に向わせたようです。敵中へ突貫する時など、酒をうんと飲ませて知性も感情も麻痺させて敵陣に跳り込ませた由です。

それに近い話ですが、休戦の時、敗戦の責を負つて切腹された二人の大将の現状を、或る将校から聞いたことがあります。其日飲んで酔い酔うて、用意を命じられている。愈々暁に切腹されるのだと噂していると案の定切腹された。縁側に絹を敷いてされたが、凄じいもので、後仕末が大変だつたとのことです。

心中や飛込自殺は、突発の感情からやるので、何かロマン的な夢や感傷だの又やぶれかぶれになつてやるようです。死損じた人は再び企てようとしないもののようです。但し精神的に欠陥のある人は別でしよう。

○

私の一親友が一昨年亡くなつたことです。私と同年ですが死の五六年前倒れてから跛をひくようになり、片手も不十分でしたが出来る限り仕事もし、最後に倒れる寸前まで

無理に散歩をし、感慨を手帳に記していたことです。

彼の死する一ケ月前あたりからの日記を見ると、信仰を以て死と対決しようとしたらしいのです。迚も読み辛い字ですが、全体に禅の偈のような、又俳句のような隻句ですが、「救は八方空の清貧に」とか「払掃俗念物外心」とか又「下々の落ち心地」といつた句ですが、「老疾貧愈々濃し静かなる終末を希うや切なり」又「老貧疾の晩年をして残光あらしめよ」などといつている。更に「絞首台上数分の人生なりとも人生として処すべきなり」とも記しているが、終りには、「畢竟するところ汚穢の裸に溺没して、静かに虚無を味到して昂々として別界に生死せん」といつた言葉を綴つて終つている。死に対つて虚無を感じたらしいのです。禅の空といつた思想的なものでなく、現実に切々とそれを感じたことが読みとられるのです。

○

そした彼の心境にふれた私は、空といつた念、それは死を見詰め、無情を信仰を以て対決しようといつた心が急に強くなつて来たことです。

そして本当に信仰を以て死の覚悟が出来るものか、禅の上で「死を諦める」即ち死を明かにし、平気ならしめるというように見られるのが、本当かどうか。生に対する我執、執念などに係り合つていては涯しがないと諦め、蹴飛ばして問題にしないのが禅の断であるのか、何うであろうと日夜考えたことです。

昨年正月、年始旁T先生を訪ねて、かの名僧が山門に縛り上げられて、火を放つて焼かれる刹那の遺偈に「心頭滅却すれば火も又涼し」といつたこと、それは本当に心頭を滅却するとそうなるでしようかと尋ねた。「それは本物ではないよ」といわれた。幾分、野狐禅的なものが加わつているのであろうか。朝比奈宗源師にお聞きしたいと思つていることです。

今私の無常な肉体、それに宿つている自我、それを永久に存在するもの、常住なものに思いたくて仕様がない。この思いそれを絶対者の立場から見るとあられもない凡夫の迷妄に過ぎないものだと憐れに見られよう。

我々には有か無かの相対概念しか持ち合せていないので、どれだけ押し詰めても、それ以上の世界を思惟することが出来ないのであるまいか。それだと下手な考え休むに似たりで、それは概念の遊戯に終つて、それ以上に進めないものだとすべきです。そんな不似合な無駄骨を折るのは愚な訳です。それだからの救いであり信仰なのだと思うのです。

○

先日歌壇関係の集りで、幾人かの私に近い齢の方々に会

つたことでした。多くはやつている健康法を語り、体も心も若く、明るく生きようとしていられるようで、死と対決処でなく、そんなことを考えまいとしているようでした。

無常や死と係り合うのが之は迷いだ、涯しのないことだとお手挙をした私には、成程世の利巧な人々はそうだろうと思つたことでした。

だが、わが空穂翁はそれと大違いです。係り合つて涯しのないもの、それをそれとして、人間というもの全体がそれだとし、無常な人間の全体を摑んで立つていられる。之は禅の生を明らめ、死を明らめるそれと等しく、生死解脱の悟りの境にあるのだと思うんです。

対決などしようとされず、相手にしない超然とした態度、それを禅の境だと思うのです。

○

相手にせぬということは悟りなのです。涯しのつかぬものと知つたら相手にして、ねちねち取つ組んでいるのは迷いであり、愚かなことです。

処で、相手にしないのと、逃げて触れまいとするのとは違う。相手にしないのは勝つているので、逃げるのは負けてしまつているので、ここに迷いと悟りの明らかな土俵の剣が峰の分れ目があるのです。

追記

花田さんから前記の拙文の慈光誌転載を承り、筆を加えることを約しましたが、一度出来た物に手が入れにくく、書き添えることにしました。

○

私共のもつ知性も感情も、生活欲望を遂げようが為のものようです。言い換えると自我を遂げるために発達したもののようです。その点、自我意識をもたぬ一般生物よりも厄介な生き物です。生物なら生本能だけであるのに、我々人間は自我を意識し、生を意識し、死を意識し、それで苦しむのです。

自我といいそれのもつ知性といい情意というもの、それを仏が見られると煩悩の一語につきるものでしょう。このごろ個性の伸長と申しますが、仏教には個性といつた語がない由です。煩悩の種々相でしょう。近代生活は意欲が必要だといわれ、社会生活も生物としての人間で欲望の充足が文化を生むのだと申され、煩悩の生活です。

我々自我の知性をどう搾つても、人間としては、相対的に善と悪、有と無、利と損といつた相対的な考しか出ません。それを越えた無碍の一道がちよつと判る筈がありません。吾々の考と全く反対だからです。情の方では自が可愛くその自我を守り太らせ、永久にあらしめたい一念で、

知性もその自我我欲に盲従している形です。だからそれが憐れで捨てられぬとの本願の喚び声なのです。

そした自我の手の付けようのない全体を指して、前文で「そした己だとし、相手にせぬのが悟りだ」と申したのです。これは判つた風をしている意でもなく、知性の上で底を見透した意でもないのです。「悟り」というて理の上、知の上ですじが判つてもそれは空手形で絵にかいた餅で、情の空腹が満たされないと我が物になりませぬ。

「手の付けようのない己の全体それをこちらに任せよ」との仰せに打任せ、己に見切りが付いたのを悟りと申したのです。こちらは自我我欲の小知、それが破船し、向う様の大智の船に飛び乗つた知です。

「弥陀の智慧を賜りてひごろの心にては往生かなう可からずと、もとの心をひきかえて本願を頼む」ので、大智をこちらに頂くので、相対的物尺を捨てて向う様の不思議の仏智にお任せするのです。

常観先生は常々「弥陀の智慧をたまわりて」の御文の智慧をしきりに仰せられ、又和讃の「無碍の仏智」「仏智不思議」又「智慧の念仏」の御文、それに「本願円頓一乗は逆悪摂すと信知して」の和讃の「信知」を強調されました。〃この信知によつて仏の大智を戴き、おのれの小見では駄目なことを悟るのだ〃と申されました〃世の見るように、念仏は感傷的に喜ぶのみのものではない。弥陀の智慧をたまわつて信知するのだ〃と申されました。それでこそ自我に執して死にたくないという生に対する執情をもつたまま、じたばた藻掻くまま、願船に引取られるのです。で無常を厭う情執はもつているが、信じ智らしめられ、決定の急所を抑えられて引取られるのです。

念仏のお粥で生かされて居りながら、固い御飯が食べた い我情が偶々頭をもたげて来るのです。私が信仰をもつて死と対決しようとしたこともそれです。自分で死に対する厭な気持を処理出来る気がしてやつた惑いでした。私も一の哺乳動物でしかないのです。対決してサラリとなりたい欲望、それも駄目でした。出来る純信の方もある由ですが私には駄目でした。

念仏は逃避といつた消極でなく、我情を捨てて願船に乗じ、横ざまに四流を超断するという積極的な、実に大勇猛です。

「末灯鈔」第六通

花田正夫

原文

㈠ なによりも、こぞ、ことし老少男女おおくのひとびとの死にあいて候らんことこそ、あわれにそうらえ。

㈡ ただし、生死無常のことわり、くわしく如来の説きおかせおわしましてそうろうえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう。

㈢ まず善信が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定の人は、うたがいなければ正定聚に住することにて候なり、さればこそ愚痴無智の人もおわりもめでたく候え。

㈣ 如来の御はからいにて往生するよし、ひとびと申され候いける、すこしもたがわず候なり。としごろ、おのおのにもうし候いしこと、たがわずとこそ候え。

㈤ かまえて、学生沙汰せさせたまいそうらわで、往生を逐げさせたまいそうろうべし。

㈥ 故法然聖人は「浄土宗のひとは愚者になり往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、もものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覧じては往生必定すべしとて、えませたまいしをみまいらせ候いき。ふみ沙汰してさかざかしきひとのまいりたるをば、往生いかがあらんずらんと、たしかにうけたまわりき。いまにいたるまでおもいあわせられ候なり。

㈦ ひとびとにずかされさせたまわで、御信心たじろがせたままわずして、各々御往生候べきなり。ただし、ひとにすかされたまい候わずとも、信心さだまらぬひとは、正定聚に住したまわずして、うかれたまいたるひとなり。

㈧ 乗信房にかようにもうしそうろうようを、ひとびとにももうされ候べし。あなかしこ、あなかしこ。

文応元年十一月十三日

乗信御房　　善信（八十八歳）

解説

『末灯鈔』は、覚如上人の御次男、従覚上人の編集せられたもので、親鸞聖人の御晩年に、関東の御同朋にあてられた御消息や、御法語を整理せられ、これこそ末代を照らす灯炬である、念仏成仏の咽喉であり、愚痴愚迷の者の眼目であると深く渇仰していられるのであります。

○

本鈔第六通は、聖人八十八歳の十一月十三日に、乗信房のたずねにこたえられたもので、恐らくは現存の聖人の御消息のうち最終のものでありましよう。

乗信房は、関東の聖人の御弟子には相違ありませんが伝記が伝えられず、名だけが知られている人であります。

一

なによりも、こぞ、ことし老少男女おおくのひとびとの死にあいて候らんことこそ、あわれにそうらえ。

当時のことを誌した日蓮上人の『立正安国論』に、

「旅客が来て嘆いていうには、近年から近日に至るまで天変地夭、飢餓疫癘が天下に遍満して、広く地上にほとばしつている。牛馬は巷にたおれ、骸骨が路にみちている、大半の人々は死んでしまつて、そうした悲しみを持たない者は一人もない」……〈文応元年〉

又、『吾妻鏡』に、文応元年六月四日のこととして、

「諸国飢饉、人民病死す云々。疾疫対治のために、祈祷を致すべきよう諸国守護人に仰せらる云々。」

とあります。老聖人は京都にあつて、このことを乗信房から聞かれ『あわれにそうらえ』と満腔の御同情をよせていられるのであります。

二

ただし生死無常のことわり、くわしく如来の説きおかせおわしましてそうろうえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう。

それにつけても、生死無常の道理は、釈尊がねんごろにかねてからお説き下さつて、そのゆえに大慈大悲の本願をおこして下さつていることだから、こうした無常転変のはげしい嵐にあうにつけてもいよいよ本願を仰いで念仏に安らがせて頂いて、おどろき、うろたえ、たじろぐようなことのないように、との思召しであります。

釈尊は、大無量寿経に

「そもそも生死は世の常の道で、次から次へと何時まで

も止む時がない。父はその子の死をなげき、子はその父の死を悲しむ、兄弟夫婦互にその死をなげき悲しむ。若い者が早く死ぬというさかさまごとがあれば、老いたるものが先きに死ぬるというものもある。老少不定であとさき定まりのない生死こそ無常の根本である。……この道理を教えてこれを導くけれども、信ずるものは極めてすくない。この故に生れかわり死にかわりいつまでも流転してやむ時がない云々。

ある時は、親子、兄弟、夫婦の中で、一人は死し、一人は生き残つて互にあわれみかなしみ、恩愛にしばられ、思慕に結ばれ、憂い痛んで、思いはいや増すばかり。日を過し歳を経ても解けやむことがない。たまたまみのりを説き聞かせても、心ひらけず、ただ恩愛思慕して、眼はくらみ、気ふさがり、まどいの雲に覆われ、自ら思い沈んでばかりいて、大勇猛心をおこして道を求めることも出来ないで、ぐずぐずして一生を空しく送る。いのちが終つてはどうしようもない、とりかえしのつかぬことである云々」

とお説きになつています。まことに切々として肺腑をつく御教化であります。又、釈尊御出家の最大の動機が、生老病死の苦の諦観にあつたことは、仏伝を読む人々のよく知ることであります。私共は親を亡くし、兄弟を失い、朋友と別れても、我身の無常には気づかず徒らに暮し、空しく過ごすのでありますが、青春血気溢れる時に、生死無常に驚かれた釈尊が、これを深く徹底的に見きわめられて、万人ののがれ得ない、そして万人の如何ともなし得ないことを知りつくされて、ここに生死出ずべき大道を得られ、しかもそのひかりを、老少善悪のへだてなく、一切人に与えたいとの大慈悲心から、絶対無二の念仏成仏の無碍の一道をお説き下さつたのであります。

そうしたわけであるから、天災地変、疫病流行、牛馬斃れるという大難にあうにつけても、いよ〳〵仏陀の恩徳の深いことを仰いで、驚きたじろぐことのないようにとの仰せであります。

三

まず善信が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定の人は、うたがいなければ正定聚に住することにて候なり、さればこそ愚痴無智のひとも、おわりもめでたく候え。

「まず善信が身には臨終の善悪をばもうさず」とは、何という力強い、有難いお言葉でありましようか。

私共は根強い自力我慢の心があつて、仏の本願はどんなに大きくても、矢張りすこしは善くならねば本願からもれるであろうという、へだて心が常に働くのであります。

「衆生有碍のさとりにて無碍の仏智をうたがえば
ソウバラビンダラ地獄にて多劫衆苦に沈むなり」

そこに本願のまことに安んじ得ないで、はてしない流転の苦が続きます。すこしでも殊勝らしい心がおこるとこれでこそとなり、それが砕けると矢張り駄目だ、と沈むのであります。浮沈、漂没はてしのない苦海であります。

近角先生からよく承りました喩えに「濁つた水を入れた槽を放置しておくと、おりが底に沈んで、上澄みになるがすこしでも動揺するとすぐもと通りに濁つてしまう。それではこまるとまた放置すると上澄みになるが、また駄目になる。こんなことをいくらくり返してもはてしがない。仏が救うて下さるのは、濁つた槽水に、清らかな水を無限に注ぎこんで下さると、その水の力で自然に浄化せられることである。」とありますのを思い合せます。

この無窮の願力、無碍の仏智に、自力我慢の心がおさめとられて、「本願をさまたぐるほどの悪なし、悪をもおそるべからず」の仰せに、へだて心の底を抜かれた人にこそ、「臨終の善悪」も用事がないのであります。

昔から、臨終儀式といつて、仏教者の臨終に正念を祈り色々な儀式までして立派な往生を願うことが一般にありました。然しそれが立派に出来なくては、浄土に生れられないとすれば、臨終の時まで安心は出来ません。死の縁無量の世にある私共には全く望みを断たねばなりません。聖人のおすすめは、平生の時に仏願のまことに安住し、摂取不捨の光益を蒙る身には、たとえ睡眠死であれ、酔死であれ、耄碌死であれ、狂死であれ、身にもつ業報にまかせて、「臨終の善悪をば申さず」との信味であります。

『口伝鈔』に、聖人の思召しを伝えられて「凡夫として毎時勇猛のふるまい、みな虚仮たる事」と題されて、凡夫のかざらず、りきまず、本願ひとつをたのんで往生すべし、とねんごろに示されてあります。

また『歎異抄』の九章に「よろこぶこころもなく、いそぎ浄土に参りたきこころなき者を、仏はかねてしろしめしことに憐れみたまう大悲大願のたのもしさ」を讃仰して居られます。

「信心決定の人は、うたがいなければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚痴無智のひともおわりもめでたく候え」

平生の時に「十方世界を照曜する弥陀仏日の光明にはぐくまれて、無明煩悩の闇がようようにうすらいで、宿善開発のあかつき、選択の願心に信順して念仏申さんと思いたつ心のおこるとき」摂取して捨てたまわぬめぐみにあずかり、その心光照護のもとに、間違いなく浄土に生れさせて

頂ける身に定まるのであります。これというも、一から十まで如来からの賜で、全部煩悩のかたまりである私共の方から持ち出すものはちつともありません、仏智のひとり働きであります。かくて臨終をまつことなく、来仰をたのむこともいらず、如何な愚痴無智の身も、念仏成仏させて頂くことが出来るのであります。

四

如来の御はからいにて往生するよし、人々申され候いける、すこしもたがわず候なり。としごろ、おのおのに申し候いしこと、たがわずとこそ候え。

〃聞けば「如来の御はからいひとつでたすけられる」と人々が申していられるとのこと、その通りで、すこしも間違いはありません。関東で長々の年月、くりかえし皆様方に申しましたことを間違いなくよく聞きとつて下さつたことで、まことに嬉しいことであります、〃との老聖人の微笑がそこにうかがえるのであります。

『執持抄』に「往生ほどの一大事、凡夫のはかろうべきことにあらず。ひとすじに如来にまかせたてまつるべし」とあるますが、聖人は常に「如来の御はからい」ひとつを勧めて居られます。「仏が救うて下さる」のであつて、こちらから加えたり減じらしたりすることは無用であります。ある御講師は「乗せて渡すとある願船に、足の強い弱いを論ずることはいらぬ。足の強弱は自分で歩いて行く人の話である」と常に申されましたが、一言急所をつかれた名句であります。又、一蓮院師は「招喚の声がそのまま救いぞ」とお勧め下さり、綺田の源通寺さんは「お声が親様である。活仏とはこのことじや」と申された由であります。

五

かまえて、学生沙汰させたまいそうわで、往生を逐げさせたまいそうろうべし。

如来の金言をよく守つて学問沙汰におちることなしに、往生の本懐を遂げて下さるように、との老聖人の悲願のあふれる御言葉であります。しかもそれは聖人の独りぎめのお考えではなく、恩師法然聖人の常の仰せでありました。

六

故法然聖人は「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、ものも覚えぬあさましき人々のまいりたるを御覧じては、往生必定すべしとて、笑ませたまいしを見まいらせ候いき。ふみ沙汰してさかざかしきひとのまいりたるをば、往生いかがあらんずらんと、確かにうたまわりき。

いまにいたるまで思いあわせられ候なり。

仏智の不思議にあわれた浄土の高僧達は、規を一にされて、愚者に帰つて居られます。愚痴の法然房、余が如き頑魯の者の源信、我等愚痴の身の善導、一生造悪の道綽、等々と告白、懺悔せられて居ります。わが聖人は、こうした高僧の内賢外愚の、内にみのるほど、外に頭の下げられた御徳光に照らされて、御自らは、外賢内愚、内がからつぽであるから、外に賢善の振舞のやまぬ身と表白せられ、本当の愚者の故に、愚者と思えぬ身と底をついての信嘗を持たれて居ります。私共もかかる徹底した聖人の御告白の前には、全くかえす言葉も無いのであります。

念仏のひかりは、それによつて私共が賢くなるのでなく、いよいよ我が身の愚かさが知らされ、救いなき身の全体を照護して下さるのであります。

法然聖人の御在世の時、近侍して親しく御教を蒙つていられた時、ものも覚えぬ無学の人々が、まいられて「あゝ有り難いことよ南無阿弥陀仏」と素直に念仏されるのを見送られては、きつと往生することであろうと、御満足の笑みをたたえられ、それに反して観念論におちてむつかしい学問沙汰に明けくれる智者、学者のことは、往生もむつかしいであろうと悲嘆せられた恩師のお姿とお言葉が眼底耳裡にあきらかにきざまれて居り、お別れ申して五十年近い今日もその仰せのままの状態を見聞しては、思いあわせられることである、と聖人は書き添えられたのであります。

七

ひとびとにすかされさせたまわで、御信心たじろがせたまわずして、各々御往生候べきなり。ただしひとにすかされたまい候わずとも、信心のさだまらぬひとは、正定聚に住したまわずして、うかれたまいたるひとなり。

釈迦弥陀二尊の喚び声に導かれて、貪欲と瞋恚の、火と水の河を渡る時、異学、異見、別解、別行の人々の声が聞こえて来る。

「自分は本当にあなたのことを思うから言うのであるが、その道はまことに危険で、とても渡れるはずはない。すぐひきかえしなさい」

と二河の喩にとかれてあります。この時旅人が右顧左眄するときは、身を亡ぼします。老聖人の悲心は、この喚び声によろめく旅人に、

「ひとびとにすかされさせたまわで、御信心たじろがせたまわずして、各々御往生候べきなり」

と、前に後に、右に左に寄り添うて下さるので、この護念がなくてはすぐに迷いこむのが私共の歩みであります。

この護念力に引き戻され〳〵して白道を辿らせて頂けるのであります。

「ただし人にすかされたまい候わずとも、信心のさだまらぬひとは、正定聚に住したまわずして、うかれたまいたるひとなり」

とは、たとえ人にだまされなくても、信心の決定しない人は、仏力に照護せられず、摂取不捨のめぐみを蒙らぬことゆえ、浮き草同様のさすらいのやまぬのも、やむないことであると、いよいよ脚下を照顧せしめて下さるのであります。

私共はともすれば罪を他人に帰して、自分は責めないのでありますが、人にだまされるのは、だます人も悪いが自分に隙かあるので、そうしたことを機縁として聞法を大切にせねばなりません。徒らに他を恨み、他を責めて、自己の欠点を省みないならば、下から闇に沈むばかりであります。

蓮月尼の有名な歌に、

宿かさぬ人のつらさをなさけにて
おぼろ月夜の　花の下ぶせ

とは、その微妙な味いであります。

八

乗信房にかように申しそうろうようを、ひとびとにも申され候べし。　あなかしこ、　あなかしこ。

と、結ばれています。八十五歳の聖人の御消息に「目も見えず候、大方はうち忘れ候云々」とありますが、さすがに御晩年には御身体のおとろえをおぼえられながらも、なお御著述に、御筆写に、御消息にと御精進を続けられる老聖人の大悲心を愈々感佩申すことであります。

昭和卅八年八月十七日

パスカルの言葉

人間は現在の楽しみをつまらぬものだと思う。しかしまだ味つて見ない楽しみのつまらないことを知らない。

これが、人間を幸福から幸福へと転々と移り求めて、すこしも満足することが出来ない理由である。

遂には倦怠におちいる。熱情を失い仕事も手につかぬ時ぐらい苦しいことはない。そこで慰安や気晴らしを求めて自分の悲惨さを忘れようとする。

○

天下第一の哲学者でも、身体よりも少しばかり広い板にのつて深淵に臨むならば、いくら理性的には一身の安全なことが解つていても、想像力に支配されて恐怖の念にふるえるであろう。実際こんな状態を想像しただけでも顔いろが蒼ざめて冷汗をかかずにはいられない人が少くない。

念仏の妙用

長岡　高人

念仏は、集約現象である。

永遠に目覚めた仏陀の三世通達の智慧を、現在のぎりぎりの一念にしぼりあげた一滴の名号、それが「ナムアミダブツ」である。

この名号は、大智大悲の豊かな久遠の親の乳房から、餓えて狂う私の上に、無限に注ぎ込まれて来る白く温かな純無垢の乳なのである。

○

念仏は、截断現象である。

それは苦しみも楽しみも、悲しみも喜びも、すべてそのような私の悶えの根をひとからげにして、唯一念の「ナムアミダブツ」においてサツと断ち切つて下さる。それはむしろ悪業煩悩を限りもなく包んでいる私のいのちそのものを、現在の南無の一息にきつぱりと截断せられる。

○

念仏は、解放現象である。

それは私の苦楽も、悲喜もすべてそのような煩わしいものを数限りもなく包んでいる私のいのちが、広やかに、深々と、何の障りもなく「ナムアミダブツ」の一念の裡に、そのまま抱き摂め取られて、私の持つているすべてのものが、おのずからなる安らかさの上に明るく生かされることである。

○

念仏は、創造現象である。

それは私のいのちを集約して、截断することでありながら、同時に拡散して解放する。そしてこのどこまでも矛盾し合う二面が、そのまま絶対にとろけあう一瞬一瞬を、わたしの生活の全面に生き生きと生み出して行く。それは「ナムアミダブツ」にこもる限りない広さと、底いない深さとを、現在の一念において歴史的に創造しつつ生きて歩ましめられることである。

昭和二十七年十月二十五日

慈光　第十五巻　第九号　昭和三十八年九月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

あとがき

南ベトナムの仏教徒の惨事がしきりに報道されて居ります。段々と政治的紛争にまきこまれて行くことは悲しい限りでありますが、かつてキューバ事件でカソリック教徒である人々が共産圏内に入らねばならなかつたようなことのないように、関係各国の善処を得て、真の信教自由の国となりますよう祈念して居ります。

○

日本では織田信長が強大な武力をもつても石山本願寺を降すことが出来ず、徳川氏の勢力をもつてしても、三河の一向一揆のために手を焼いて居りますが、宗教は武力や権力をもつて如何ともするこの出来ないものを持つて居ります。むしろ一番おそろしいのは「獅子身中の虫」といましめられる如く、宗教者自身であります。ベトナムのこの惨事を対岸視することなく、私共のよき反省の鏡としたいものであります。

○

近角先生の「信楽釈」は真宗の在り方とか、現代人と真宗ということがしきりに唱えられていますが、根本の信心の問題は素通りになり、社会々々ということに心が向けられて、自分自身のことが盲点になつて居ります時、先ず何をおいても、先生の御提唱に耳をかたむけて頂きたいと存じます。

○

常音先生のお法話を頂きました。当時常観先生は御病身で、日曜講話は両先生が同一の題でお話し下さつた由であります。三瓶師も柳瀬様もつねに、「両先生を分けて思出すことはむずかしい、何時もお二人のことが一緒に想い浮びます」と申されていますが、全くその通りと共感致して居ります。

○

「死と対決出来るか」の柳瀬様のお原稿は、短歌草原誌の巻頭言をお許しを貰つて本号に頂きました。その節追加原稿を急送して下さいました御厚志を謝して居ります。

○

末灯鈔の第六通につきまして、聖人の御消息として現存する最後のものであり、繰り返して拝誦して居りますうちに、心を強くうたれますものがあり、発表させて頂きました。御晩年の御胸に溢れる大悲のしたたりを原文をとおしてお味い下さいますように……

○

「念仏の妙用」は盛岡の長岡様から教年前に頂いて居りましたものを頂きました。

みほとけの御名を称うるわが声は
わが声ながら　尊とかりけり

和里　子女史　詠

◎御案内◎

△毎月第一、二、三、日曜午后一時半。
一道会館。
市電新郊通一丁目下車東入ル一丁半。

△毎月廿四、午前午後、昭和区小楼町、
教西寺法話会。
市電御器所道り下車。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田　正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田　政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番